

第 3 分科会		研修俯瞰図番号 E 5	
テーマ	八角園舎(旧旭東幼稚園舎)で民話体験		
会場	八角園舎(旭東幼稚園舎)	講師	立石憲利先生(岡山民俗学会名誉理事長)
ねらい	八角園舎は、明治に建てられた園舎を、記録に基づき当時の姿に復元されたもので、平成 18 年には文化財的価値が認められ、国の重要文化財に指定された。この趣のある建物を見学し、岡山県内の民話「語り」の第一人者である立石憲利先生の民話を聞き、語りの実践にも挑戦し、表現力を磨く。		
日程	8 : 20 岡山市営 駅南駐車場 集合 8 : 30 駐車場発 9 : 00~9 : 30 八角園舎説明・見学 図書館に移動(視聴覚ライブラリー) 9 : 40~11 : 40 民話体験 11 : 50 図書館発 12 : 20 岡山駅西口 着 解散		

### 《内容》

#### ■八角園舎

この建物は明治 41 年 6 月 30 日に竣工した岡山市立旭東幼稚園の旧園舎を、昭和 55 年に解体保存し、平成 10 年 10 月 31 日に当時の記録等を照合しながら移築復元したもの。建物の土台・柱・小屋組みは当時の部材を使用している。建物の特徴として、八角形寄棟造の遊戯室の四方に切妻造の保育室や管理棟を接続している点である。管理棟から園児の動きを把握することを最も意識したものであり当時の幼稚園教育の理念を示す配置といえる。これを設計したのは岡山県工師 江川三郎八で、平成 19 年 6 月 18 日に文化財的な価値が認められ、国指定重要文化財となった。幼稚園園舎への指定としては全国初となる。現在は、木のぬくもりに包まれ、文化財を体で感じると共に幼い子供の子育てをしている同世代の親子の交流や、音楽会・パネルシアター・人形劇・腹話術・わらべ歌などの催しや学生ボランティアによるリズムあそびを親子で楽しんだり、物づくり体験をしたりと幅広く市民のコミュニケーションの場として利用されている。

遊戯室



遊戯室で、河本館長の説明を聞き、園舎内を自由に見学。八角形の広い部屋で訪れた子ども達がのびのびと遊べる場所である。

絵本のへや



絵本の部屋は、選りすぐられた絵本と身近な物を利用した手作りの玩具で溢れ親子が触れ合える空間になっている。

展示室



明治・大正・昭和の幼稚園の写真や本を展示している。旭東幼稚園保存の物を中心とした、貴重な資料ばかりである。



## ■民話実践体験

最初に聞いたネズミの商売の話に参加者が語ってみる。



### ～あらすじ～

むかし、岡山の京橋という所でネズミが商売を始めた。そこに、ネコがやってきて「これは、にゃんぼなら？」と尋ねると、ネズミは、「チュー円・チュー円」と答えた。そうしたら、空の高い所を飛んでいたタカが「たけえー・たけえー」と言い、橋の下の低い所にいたヒキガエルが「ひきいー・ひきいー」と混ぜ返した。そこにいたアリが、「たこーても、ひくーてもアリったけの物をくれ」と言って全部買って帰った。

むかし こっぷり

ポイント① 筋を覚え、自分の言いやすい言葉で伝える  
まる暗記しない・文字で覚えようとするとう時間がかかる。

ポイント② 動物の鳴き声

ネ コ・・・これは、にゃんぼなら？

ネズミ・・・チュー円

タ カ・・・空高い所から、たけえー・たけえー

ヒキガエル・・・橋の下の低い所から、ひきいー・ひきいー

ア リ・・・ありったけ

ポイント③ 話し手の身近な場所（橋）で、ネズミの商売を開けば良い＝親しみもてる

## ■実践体験の感想

- ・頭で話の筋は理解できたつもりでも、実際話すととなると難しい。
- ・思うように言葉がなかなか出てこなかった。
- ・自分のものになるよう、この研修をきっかけに勉強したい。



《まとめ》

### ◆立石先生の話

語りの面白さは繰り返して、子どもは3回以上の繰り返して楽しさを感じられる。自分の思うストーリーになった時「やった」という喜びや満足感を味わえる。江戸時代は文字の読み書きができる人が少なかったが、語りは何の資格がなくてもできるので、600話も語れるお年寄りから何十年も口伝えで残されてきた。昔は、冬の夜、寝る前に母親から昔話をしてもらったものだった。大人になりそのことを忘れていても、居ねむりしながら布団の中で体をくっつけて語ってくれた母の愛・肌の触れ

合いと温もり・聞き慣れた声・息遣い・鼓動を感じたことをこと覚えている。だからこそ、親の愛情と物語と一緒に聞けていた思い出が、愛されていたという記憶となって残っている。現代のように、親が携帯に夢中になり、テレビに子守りをさせるのは一方通行で心がない。「相槌」ということばがあるが、相方通行の関係は大切で、昔話は語り部と聞き手の共同作業の産物と言え、親と子の関係を作る。

ゴムとびの例をあげると、昔の子はどうしたら皆が楽しく遊べるかを考えた。小さい子が跳べるように低くする等、思いやる気持ちがあった。しかし、今の子どもは、実力のある子どもが楽しめるようにしようとする傾向にある。小さい子にゴムを持たせ、つまらないと感じる子どもが出てきてしまう等いたわりの気持ちが少なくなってきたのではないか。

現在、語れる人が減ってきて全国で210人程になっている。語りは、筋を覚えて自分の言葉で伝えることができ、3年で50話は出来るようになる。絵本は読む人を見ないが、語りは顔を見てくれる喜びがある。語りを復活させようというネットワークが広がっているので、これからも生の声を届けていきたいと思う。



《担当園・記入者》

朝日塾幼稚園 船越 愛 ・川ノ上裕子

